

第41回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞

私の目指す幸せ

弟子屈中学校 芝田 遥夏さん



この夏休み「幸せ」について考えたこともなかった私に自分の目指す幸せとは何か考えさせる本に出会った。それは絵本であった。

私が読んだ本はウルグアイのムヒカ大統領が環境破壊された地球の未来についてどうするべきかスピーチしたものだ。このムヒカ大統領は給料の大半を寄付し、町外れの農場で暮らしている。この時点で私の思い描く大統領像とは違ふ気がした。考え方もそうであった。「わたしたちが挑戦しなくてはならない壁は、とてつもなく巨大です。目の前にある危機は地球環境の危機ではなく、わたしたちの生き方の危機です。人間は、いまや自分たちが生きるためにつくったしくみをうまく使いこなすことができず、むしろそのしくみによって危機におちいったのです。」この言葉は私にとって深く考えさせられる言葉だった。地球の環境破壊の原因は私達のせいだと言われているようだった。しかし実際にそうである。お金や便利な道具を人より多く手に入れようとすることが、大量生産・大量消費を生み出している、その結果環境破壊が進んでいると思った。

私はどうしたら良いのかと考えてみた。他人と比べるのではなく、自分自身が本当に必要としているものを大切にすれば良いのだ。そしてムヒカ大統領の農場での生活を考えると「自給自足」という言葉が頭に浮かんだ。自給自足という

意味は、自分で必要とするものを自分で作ることだと思う。しかし、ムヒカ大統領の生き方を見るともう一方の意味が私には感じられた。それは、全て自ら生産するのではなく生産したものを足りさせるという、「自らを足る」ことだ。「自給」よりも「自足」が今の私たちには重要なのではないだろうか。私は幼少のとき、多くの遊び道具を持っていなかった。他の皆は持っているのになぜ私だけ持っていないのかな、と思ったことがある。しかしそう思ったのは一瞬で、すぐに鉛筆・紙・ダンボールで弟と一緒にゲーム機に似た遊び道具を作り、ルールを考え、その中から楽しさを生み出していった。それは、遊ぶだけの楽しさだけではなく、考える楽しさもあった。道具に溢れ、道具を与えられると人は考えることをしなくなる。それと同時に創造力も失ってしまう。このことを気付かせてくれたのも多くのものを持たせなかった両親のおかげであり、一緒に遊んだ弟のおかげだ。ムヒカ大統領はこのことを気付いてほしかったのではないか。私は、今までできるだけ道具に頼らずに生活してきたつもりだった。けれども、まだ見直せるものもあるのではないか。一度手に入れたものを手離すということとは

ても勇気のいることだ。しかし、その勇気がムヒカ大統領の言う「生き方の危機」を救うことになる。

人生は短く、あつという間で命より大切なものはない。私たちは幸せになるために生まれてきた。このページを読んだ時、私は鳥肌が立った。道具やお金は現代を生きるには必要である。しかし道具やお金にふり回されることは幸せにはつながらないのだ。一人一人が「自らを足る」という意識を持ち始めることができれば、たまた便利というだけでものを持つことが減るのではないだろうか。私はこの小さな一歩が「大量生産・大量消費」に歯止めをかけてくれることを願っている。

私の目指す幸せは環境破壊と共にあってはいけない。つまり本当に必要なものと愛着を持てるもので自分を満たし、生活することにあるのだ。

書名『世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ』 くさば よしみ 著

(寸評) 「本当の豊かさとは経済的な豊かさではなく心の豊かさだ」この言葉は決して目新しいものではなく、むしろ聞き飽きた感すらある言葉です。しかしムヒカ大統領は自らの行動と分かりやすい話でこの言葉の真意を伝えてくれています。それを正確に読み取り自分の経験による実感を込めて読み手に伝えられる感想文ですね。「我慢」の上に成立するのではなく「本当の幸せ」の上に成立する環境保護の重要性にとっても共感できます。

■高校生の部 最優秀賞

音楽とは

弟子屈高校2年 鈴木 理美さん



「音楽ってよく分からない」「いつも私が思う言葉だ。私は弟子屈高校の吹奏楽部の部長である。ピアノも習ったこともなければ、楽譜も読むことすらできなかった。ただ、中学校の頃、音楽の授業が楽しかったからだと、ただ単に音楽が好きで、「少し音楽に関わってみたい」という興味本位のような浅はかな考えで入部したのが本音だ。

入部して初心者の私が思ったのが、「何事も難しい」ということだ。経験者なら初見でできるような楽譜すら私にとって困難である。経験もセンスもあまりない私は楽譜通りに演奏できればいいと思っていた。確かに、楽譜通りに演奏することは当たり前のように重要な。楽譜通りに演奏できなければ、はじまらないとも言えるだろう。

けれど私たちは、楽譜に書いていないことを求められていると思う。曲のタイトル、盛り上がり方や作曲者のことなどに曲だけではなく、歴史の部分だったり、総合的に見て、音色や音量などの表現を変えなければならぬ。私も

でもきつとそれは難しいと思う。私も

入部して一年はたつが、どう演奏したら一番適切なかが分からない。何が良く何が悪いかも分からない。そこでこう思うのだ。「音楽って良く分からない」。私は表現について、本田有明さんの『歌えー多摩川高校合唱部』をみて、とても勉強になったことがある。

例えば、部活の中で「こはさみしく演奏しよう」と曲の表現についてみんなで決めたとして、そこで『歌えー多摩川高校合唱部』では歌詞のなかに出てきた「さみしい」という言葉に着目していた。

「さみしい」という言葉には様々なニュアンスがある。英語で言うと「lonely」のほつ「さみしい」なのか、「sad」のほつ「さみしい」なのか、はたまた「vacant」のほつ「さみしい」なのか。

「さみしい」のか、理解しなければならぬ」と顧問の小倉詠子先生が言っていた。それは合唱部だけでなく、私が所属している吹奏楽部にも関係があると思う。

また、私が所属している吹奏楽部ももちろん一人でできるものでも、やるものでもない。全員でどうしたいのか理解をするためには、私たちが気持ちや表現を共有しなければならぬ。

しかし、人によりその表現の仕方が違っていたり、その共有した言葉についての認識の違いなども当然あるだろう。ひとつの「さみしい」ということだけで意味が三つもあるのだから、表現を皆が

皆同じということとは難しいことだと思う。だからこそ共有は必要で、ひとりひとりが気持ちや思ったことを伝えることも大切だし、それを受け入れなければならぬ仲間との信頼関係も大切になってくると思う。

私は吹奏楽部の部長として、音楽を奏でる身として、意見を交流したり共有することができると仲間との信頼関係を大切に築き上げていきたいと思った。

また、音楽というものは人に身近なものである。誰にでも忘れられない曲や、大好きな曲、その時共感できる詩がうたわれている曲などがあり、それぞれに思い出がある。この作品では河川敷で練習をしていた生徒が警察官に補導をされてしまつたが、その警察官は仕事を忘れて昔の頃の合唱曲のことを語っていた。その合唱曲は「大地讃頌」という有名な合唱曲で、先日行われた高文連の合同合奏曲でもある。私はマリリンバという楽器に選ばれ、何百人の合唱の人たちと五十人の演奏者たちの中で演奏した。

「大地讃頌」という曲はとても壮大な曲で演奏をしてとても感動した。

「大地讃頌」は偉大な大地への畏敬の念や私たちの母となる大地への感謝をうたった曲だった。きっと、作品の中の警察官も学生ながらにこの壮大で、偉大な曲に心を奪われたのだろうと思う。

その警察官と同じく私にも、忘れられない曲や、大好きな曲、その時の共感できる詩がうたわれている曲がある。例えば、小学校の学芸会で踊った曲

や、中学生の頃、音楽の授業ではじめてイタリ語の歌を歌った時の曲など、どれも思い出が詰まった曲ばかりだ。

このように音楽は、人の心を感動させる力や懐かしさを思い出させる、温かい感情にさせる力をもっている。

これからも思い出しに残るような音楽をたくさん増やしていきたいと思う。また、自分の演奏で誰かの思い出になる音楽を残せるようになりたい。

書名『歌えー多摩川高校合唱部』 本田 有明 著

(寸評) 普段考えていることや、本を読んで考えたことが伝わりやすい構成になっている。音楽に対する熱い思いが描かれており、楽譜通りに演奏することだけでなく、楽譜に書かれていないところまで表現しようとするこゝで生まれる苦悩と向き合っている心情が伝わってきた。本の中からヒントを得て「仲間との信頼関係」を大切にしたいという思いが描かれており、この思いを得た部長が引継ぎる今後の弟子屈高校吹奏楽部の活躍を期待したい。



※生徒の学年は、コンクールが行われた平成27年度当時のものです。